

別記様式第6

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	長谷川 佳男
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 平安朝物語の本文研究 ―狭衣物語を中心に―			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	妹尾 好信	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	久保田啓一	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	有元 伸子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	小川 恒男	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	九州大学・教授	辛島 正雄	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、『狭衣物語』を中心に、平安朝物語の本文研究の方法を具体的に提示した論考である。全体は、大序と本論3章、付章から成る。</p> <p>大序では、平安朝物語の研究にあたって、科学的な本文研究の必要性和意義を説く。</p> <p>第一章は、『狭衣物語』の本文に関して、多面的なアプローチを試みる。</p> <p>まず、小序と第一節において、研究史を整理して問題の所在を明確化する。調査し得た46本のリストを掲げ、先行説を吟味しつつ、3群に分かれることを指摘、巻ごとに本文の状況が入り乱れる同物語の特性を踏まえて、本論文では主に巻一に絞って分析と諸本の分類を行うことを明示する。流布本系統を第一群、深川本系統を第二群、異本系統を第三群と命名して以下の論を展開する。</p> <p>第二節では、最も複雑な本文状況を呈する第一群の諸本に関して、統計学的方法による本文批判を行い、更なる下位分類をする。詳細・緻密な本文分析で、統計的に数値化された分析結果は客観的・科学的に信頼できるものと思われる。</p> <p>第三節では、クエンタンの理論を援用して第二群を最古とみなす旧説が成立し得ないことを立証、次いで第一群と第三群の関係を考察する。両群に共通する「たいふの君や参り給へる」という一文に着目して双方の本文を詳細に比較分析し、第一群には時間軸で組織的に制御されたプロットが技巧的・有機的に機能しているのに対し、第三群では全く機能していないことを指摘、第一群が本来の本文に近く、第三群は改変本文であることを論証した。これは流布本系を改作本文と見る従来の説を覆す新見である。</p> <p>付節では、著者の論に批判的見解を示した論考に対して反論し、自説の補強を試みる。</p> <p>第四節では、巻一冒頭近くの引歌表現を取り上げ、第三群慈鎮本の本文を解析して、『実方集』『伊勢物語』を介して義妹恋慕の情を表したという説を批判、引歌の解釈に異議を唱える。</p> <p>第五節では、諸伝本中特異な本文を持つ九州大学蔵細川文庫本についての詳細な検討を行う。文献学的方法による緻密な考察で、各巻本文のもつ研究的意義が明らかになった。</p> <p>第二章は、『源氏物語』の本文批評である。平安末期の『源氏物語』が巻序浮動状態であったと捉え、現代とは異なる巻序が存在したという仮説の論証を試みる。</p> <p>第一節では、匂宮三帖の位置づけについて考察。宿木巻の冒頭は竹河巻に引きつけて読まれる可能性があり、また宿木巻は紅梅巻とも接続することを述べ、紅梅・竹河両巻は橋姫物語の後に位置し、宿木巻の前に置いて読まれていたのではないかとの新見解を提示する。</p> <p>第二節では、別本随一の古写本である保坂本の異文に注目し、九条家本古系図なども参照しながら、巻序浮動状態の実在性について論述する。別本の異文が平安時代の古い本文を残している可能性への論及も貴重である。</p>			

第三章は、最福寺本『伊勢物語』を扱う。第一節が本文、第二節が書入についての考察で、定家以前の本文を伝えている可能性があること、冷泉家流古注釈の伝流のあり方を示す点でも貴重な伝本であると指摘する。

付章は、『蜻蛉日記』に描かれた婚姻の実態に関して独自の見解を示した好論であるが、本編の本文研究とは趣を異にし、蛇足の感がある。むしろ、全体を総括するまとめの章を置いてほしかった。

とは言え、本論文は、平安朝物語の本文の問題に正面から取り組み、旧来の方法や固定観念を打破しつつ新たな視座を提示し得ている。各章はどれも重厚で読み応えがある。今後、『狭衣物語』の巻二以降や、他の物語の本文研究への展開を大いに期待させるものがある。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)